

令和元年6月14日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16573

研究課題名(和文) 高校保健教育における危険行動防止のための規範意識の育成を重視した授業モデルの開発

研究課題名(英文) Development of Class Model Emphasizing the Fostering of Norm Consciousness in High School Health Education to Prevent Risk Behaviors

研究代表者

片岡 千恵 (KATAOKA, Chie)

筑波大学・体育系・助教

研究者番号：30642524

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、危険行動の防止に向けて、規範意識の育成を重視した授業を構想し、前後比較研究デザインによってその効果を検討した。授業は、2017年12月に、公立高校2年生40名を対象として実施した。その結果、タイプ3エラーを避けるために実施したプロセス評価について、高い割合で肯定的回答が得られた。インパクト評価については、学校における規範意識の尺度得点が授業後に有意($p<0.05$)に高く変化した。また、授業前後における規範意識についてテキストマイニングを用いて質的に検討した結果、規範意識の捉え方に深まりがみられた。構想した授業は、危険行動に関わる規範意識の向上において一定の有効性があると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、青少年の危険行動を防止する効果的な授業モデルを開発した。その際、危険行動の出現には規範意識が強く関連するという先行知見に基づいて、規範意識の育成を主眼とした点に特色がある。これまでは、青少年の規範意識の状況が十分でないこと等の指摘に留まる報告がほとんどであるなかで、規範意識の育成に有効な授業モデルの一つを示したことの意義は大きいと思われる。また、本研究では保健教育における授業モデルを提示したが、ここで見出された規範意識の育成に関する教育の内容や方法等は、学校における他の教育機会でも考え方を応用することが可能であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we developed a class model that emphasizes the fostering of norm consciousness to prevent risk behaviors in high school students and examined the efficacy of the model by before-after study design. In December 2017, a class was held for 40 students in their second year at a 3-year Japanese public high school. As a result, positive responses were obtained from the students at a high rate in the process evaluation, which was carried out to avoid type III errors. In the impact evaluation, the score for the scale of norm consciousness at the school significantly increased after the class was held ($p<0.05$). Furthermore, as the norm consciousness before and after the class was qualitatively examined by text mining, it was found that the students deepened their understanding on norm consciousness. The developed class model was considered to be effective for improving norm consciousness related to risk behaviors.

研究分野：健康教育学

キーワード：青少年危険行動 規範意識 授業 高校生 介入評価

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国の学校保健上の重要な課題として指摘されている青少年危険行動は、「青少年期に始めやすく、本人や他者の現在および将来の健康や生命に重大な危険を及ぼす行動」と定義され、具体的には、身体運動、食行動、喫煙、飲酒、薬物乱用、性的行動、交通安全上の行動、暴力・武器携帯、自傷行動などが取り上げられている(野津有司ら, 2006)。こうした危険行動の出現は相互に関連しており、ある特定の行動が単独で出現するというよりも同時に複数出現することが多いことから、個々の危険行動に焦点を当ててそれぞれを個別に防止するというよりも、危険行動を包括的に取り上げて防止するアプローチが、危険行動の出現の特性を考慮した効果的かつ効率的なものであることが指摘されている。

危険行動を包括的に防止するには、それらの行動に共通して関連する要因を明らかにすることが不可欠である。例えば我が国ではこれまでに、セルフエスティームやレジリエンス等の心理社会的要因や Small Screen Time 等の行動的な要因に注目した報告がみられ、それらは危険行動に共通する重要な要因として指摘されている。

そうした中で研究代表者らは、危険行動に関連する心理社会的要因として、規範意識に注目して研究に取り組んできた。危険行動には、薬物乱用、交通安全に関する行動、暴力行為、未成年の喫煙や飲酒など、我が国において違法である行動が少なくなく、そうした行動の背景には規範意識の問題が内在していることが考えられる。そしてこれまでに、野津有司らが作成した危険行動に関わる規範意識尺度の信頼性および妥当性を検証するとともに(上原千恵, 2008)、危険行動との関連を検討してきた。その結果から、我が国において違法である行動のみならず、性行動、自傷行動、身体運動および食行動といった危険行動を包括的に防止する上で、規範意識が特に重要となることを報告した(Kataoka C et al., 2010; Kataoka C et al., 2012)。青少年期は、大人や社会の規範に対する反抗心が比較的強い発達段階にあると考えられることから、規範意識がとりわけ危険行動の防止に大きく寄与するのではないかと考えられる。

ところで、学校教育では青少年の規範意識の育成について近年一層重視されてきている。例えば、平成 19 年に改正された学校教育法では、義務教育の目標として、自主、自律等の精神を養うことに加えて、規範意識等を養うことが新たに明示された。しかしながら、規範意識に関する先行研究では、青少年の規範意識の状況が十分でないこと等を指摘する報告が多く、規範意識の育成に向けた具体的な授業実践に関する知見はほとんど蓄積されていない。規範意識は、単に規則を厳しくしたり、罰則を強化したり、あるいは規範を一方向的に伝えるだけでは育成されないことは言うまでもない。どのような授業実践によって規範意識の育成が促されるのかを検討することは重要な研究課題である。

2. 研究の目的

本研究では、青少年の危険行動の防止に向けて、規範意識の育成を重視した授業モデルを構想し、介入評価によってその有効性を検討することを目的とした。なお規範意識は、個人の行動を律し、集団における秩序の維持や良好な人間関係の維持、構築に寄与するなど、人間として持つべき重要な資質・能力であると言え、本研究では青少年の危険行動に関わる規範意識を「社会的および当為的な規範に対して、それを尊重し、従おうとする意識」と操作的に定義した。

3. 研究の方法

(1) 調査の対象および方法

対象は、機縁法により調査の協力の得られた公立高校 1 校の 2 年生 2 クラス、計 40 名(男子 20 名、女子 20 名)とした。授業の実施者は、当該の高校に勤務する保健体育科教員 1 名とした。

授業の評価は、前後比較研究デザインを用いて行った。2017 年 12 月に、2 時間構成の授業を 1 日 1 時間ずつ 2 日続きで実践し、その前週に事前調査を、2 時間目の授業の翌日に事後調査を実施した。無記名の質問紙法において、事前調査および事後調査の個人間のデータを対応させるために、4 桁の番号シールを用いた。

なお、調査にあたっては、調査票の表紙に調査の目的や倫理面への配慮についての説明を記述し、協力を依頼した。なお、本調査は、筑波大学体育系研究倫理委員会の承認を得て実施された(課題番号: 体 29-68, 2017 年 9 月 5 日)。

(2) 授業の概要

構想した 2 時間構成の授業モデルの概要は、以下の通りである。

1 時間目は、Kataoka C et al. (2010, 2012) によって危険行動の中でも特に規範意識との関連が強いことが示されている飲酒の防止について取り上げた。授業のねらいは、「危険行動の防止に向けて、規範に関する学習の意欲を高めること」および「規範が存在する意義に気づき、そうした規範を守ろうとすることが大切であることについて理解すること」とした。規範意識は、単に規範の重要性などを一方向的に伝えるだけでは育成されないことは言うまでもないことから、本授業では、仲間と意見交換しあう中で規範について自ら考え、そうした考えを仲間と共有しあうことを意図して、教師による発問とブレインストーミングやディスカッションなどのグループ学習を中心として構成した。具体的には、「未成年飲酒禁止法がなくなったら、どうなるか」、「なぜ、飲酒運転が後を絶たないのか」、「飲酒運転を防止するためには、どうしたらよいか」、

「私たちはなぜ規範を守らなければならないのか」について考えさせ、規範の存在意義の理解を深めるような展開とした。

2 時間目は、規範意識の中でも危険行動との関連が強いことが示されている「学校」における規範意識の改善、向上を図るために、校則を題材として取り上げた。本授業のねらいは、「自ら主体的に規範を守ろうとすることが大切であることについて、考えを深めること」、「『自分たちの校則をつくる』というグループ活動を通して、日常生活において規範を守ろうとする態度を養うこと」とした。授業の展開としては、まず、架空の A 高等学校の校則を提示し、「その校則を守りたいと思う気持ちはどのくらいか。その理由も書いてみよう。」という発問に対する自分の考えをワークシートに記入させた。その後、グループ学習として、「なぜ、校則が存在するのか」、「自分たちの健康や安全を守るための『校則』を考えてみよう」という課題を提示した。

(3) 調査内容

実践した授業のプロセス評価として、授業の内容に関する項目、授業で用いられたグループ学習に関する項目などの9項目を設定した。回答選択肢はいずれも、「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「ややそう思わない」、「とてもそう思わない」の5件法とした。

また、作成した授業モデルのインパクト評価としては、規範意識尺度(上原千恵ら, 2008)を用いた。本尺度は、青少年が日常生活において帰属する重要かつ身近な場や人間関係として「家庭」、「学校」、「地域」、「友人」の4つの下位概念が設定されている。項目数は、各下位領域において3項目ずつの計12項目である。回答選択肢はいずれも、「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「ややそう思わない」、「とてもそう思わない」の5件法である。さらに、規範意識の概念について、自由記述で回答を求めた。

(4) 分析方法

プロセス評価については、各項目の回答状況を算出した。

規範意識尺度については、各項目の回答について規範意識が高い状況ほど高得点を与えてスコア化し(例えば、「国の法律は守るべきである」の質問に対して「とてもそう思う」5点、「ややそう思う」4点、「どちらともいえない」3点、「ややそう思わない」2点、「とてもそう思わない」1点)、下位尺度ごとに合算した。そして、下位尺度ごとに、事前調査と事後調査における得点の差を Wilcoxon の符号付き順位検定を用いて検討した。

また、テキストマイニングの手法を用いて、授業の前後で生徒の規範意識の受け止め方が質的にどのように変容したかについて検討した。

なお、統計上の有意水準は、すべて5%とした。統計パッケージは、IBM SPSS Statistics 25 および IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4 を用いた。

4. 研究成果

(1) プロセス評価

まず、授業の内容は「わかりやすかったか」、「興味を持てたか」、「考えたり工夫したりできたか」のそれぞれの質問に対して、「とてもそう思う」と「ややそう思う」を合計した肯定的な回答の割合は、いずれの項目も約9割を占めた(表1)。また、授業でのグループ学習について、「楽しかったか」、「積極的に取り組むことができたか」、「自分の意見や考えを伝えることができたか」のそれぞれの質問に対して、いずれも肯定的な回答が多く示された(表2)。これらのことから、構想した授業は、概ね意図通りに実践されたことが伺えた。

表1. 実践した授業の内容等についての評価

(%)

	とても そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	やや そう思わない	とても そう思わない	計
授業の内容は、 わかりやすかったですか	65.0	27.5	7.5	0.0	0.0	100.0
授業の内容に、 興味を持ってましたか	47.5	40.0	12.5	0.0	0.0	100.0
授業では、考えたり、 工夫したりできましたか	37.5	55.0	7.5	0.0	0.0	100.0

表2. 授業におけるグループ学習についての評価

(%)

	とても そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	やや そう思わない	とても そう思わない	計
授業で用いられたグループ学習は、 楽しかったですか	65.0	30.0	5.0	0.0	0.0	100.0
授業で用いられたグループ学習に、 積極的に取り組むことができましたか	50.0	45.0	5.0	0.0	0.0	100.0
授業で用いられたグループ学習の中で、 自分の意見や考えを伝えることができましたか	50.0	37.5	10.0	2.5	0.0	100.0

(2) 規範意識尺度の回答状況の変化

授業の前後で、規範意識尺度の下位尺度のうち「学校」における規範意識の得点に有意差が示され、事後調査のほうが高得点であった(表3)。これは、2時間目の授業において、規範の中でも特に学校の校則に焦点を当てた内容としたことが影響していると思われる、その効果が伺われた。

なお、その他の下位尺度では、授業の前後で規範意識の得点に有意差は示されなかった。

表3. 授業前後における規範意識尺度の得点の変化

	事前	事後	ρ
「地域」	12.7	12.8	.410
「学校」	11.6	12.1	.594
「家庭」	13.0	13.0	.043
「友人」	12.8	13.0	.480

Wilcoxonの符号付順位検定

(3) 規範意識の捉え方の変化

テキストマイニングの手法を用いて、授業の前後で生徒の規範意識の受け止め方が質的にどのように変容したかを検討した。調査は、「規範意識」とは何か、または、どのようなものかについて、自由記述で回答を求めた。

事前調査では、調査対象の40名のうち25名から、計57個の文章が得られた。その57の記述から、調査対象数の10%以上、すなわち4回以上みられたワードの関係性を示したサークルレイアウトを図1に示す。4回以上見られたワードは、7つであった。事前調査では、「ルール」、「守る」、「意識」といったワードが特に頻出しており、規範意識について「ルールを守る意識」といったように表面的に理解している様子が伺えた。

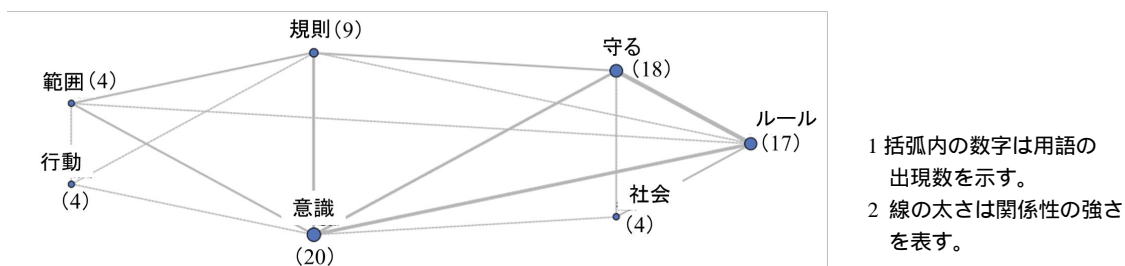


図1. 事前調査時における「規範意識」に関するサークルレイアウト

同様に、事後調査の結果を図2に示す。事後調査では、40名のうち36名から、計78個の文章が得られた。4回以上見られたワードは、9つであった。事前調査に比べて、まずは量的にイメージが膨らんだことが伺えた。その上で、規範意識の受け止め方が質的に変化したことが見受けられた。すなわち、「ルールを守る意識」といったイメージが多いことは事前調査と同様であるが、それに加えて、規範意識というのは自分自身が主体となって実際に守ったり、考えたりしていくことによって意味があるというような回答が散見された。これは非常に重要な点であり、規範意識を単に客観的に捉えるのではなく、自分のこととして捉え、自分自身で考え、守っていくという態度が見受けられるようになったと受け止められる。また、規範を守ることは、自分の命や健康・安全に関わるということが理解されている様子も伺えた。

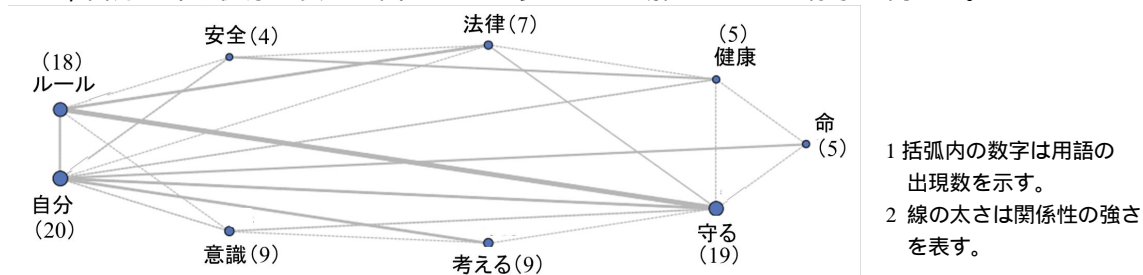


図2. 事後調査時における「規範意識」に関するサークルレイアウト

以上の結果より、本授業モデルは、危険行動に関わる規範意識の向上において一定の有効性があると考えられた。

5. 主な発表論文等

[学会発表](計1件)

- ・片岡千恵, 野津有司: 危険行動防止のための規範意識の育成を重視した授業実践の評価. 一般社団法人日本学校保健学会第65回学術大会(大分), 2018年12月(査読無)

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名 :

ローマ字氏名 :

所属研究機関名 :

部局名 :

職名 :

研究者番号 (8 桁) :

(2) 研究協力者

研究協力者氏名 : 野津有司

ローマ字氏名 : NOZU Yuji

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。